

3月報(2022年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらす福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町 7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

(「信仰を生きる」シリーズ)

神の計らいは限りなく…

池田春子

ある日の月報委員会で、「信仰を生きる」というテーマでの原稿依頼先を探していた時のことです。フレデリック神父様に「池田さん、どうですか」と水を向けられ、私は咄嗟に断ってしまいました。「全然信仰を生きていないよ…」と思ったからです。同時に「いつか信仰を生き、といえる日がくるのだろうか」という疑問がうっすらと湧いてきたのを憶えています。あれから3年余り経ちますが、私は未だ、キリストへの信仰のうちに生きているとは到底言い難い状況であることを告白しなければなりません。日々のお祈りは短いわ、日曜のオンラインミサは寝坊したままサボるわ、家庭では…とこれ以上書くなら告解室に行くようになるのでやめておきますが、キリスト者としての自覚をする機会も少なく、それに基づいた行動もできていません。そんなアカンタレ信者が、このような原稿を書く資格はないような気がします、福山教会を離れようとする今という節目に、貴重な紙面をお借りして、自分の拙い信仰の歩みを振り返ってみたいと思います。

私はカトリックの幼稚園に通っており、物心のついたときには父に連れられて、毎週教会に通っていました。新潟の寺尾教会というところです。父は私が6歳の頃に洗礼を受けたと後に知りました。家族にも、周囲の人達にも非常に愛情深く、信仰熱心な父でした。私も、その父に勧誘される(?)がまま、何の疑問も持たず、小学2年生の復活祭の時に2歳違いの弟と共に洗礼を受けました。私にとって寺尾教会は、特別に温かな、懐かしい場所として思い出されます。というのも、私が洗礼を受けた数か月後に、父と弟が不慮の事故により帰天し、母の実家のある岡山に転居することになったからです。それまで未信者であった母は同年の冬に受洗し、岡山に帰ってからも、私を連れて毎週欠かさず岡山教会へ通うようになりました。当時の主任司祭のスメット神父様が、広い教会を案内してくださり、朝いちばん早くミサに来る私たち母子のために、手ずからストーブをつけてくださっていたことを思い出します。このようなわけで、学童期の私にとっては教会に通うことは自然な習慣であり、教会は大勢の人たちと温

かく交わることのできる場所でした。思春期にはだんだん多忙になり、教会に通うのも億劫に感じることもありました。幸いにも若者好きの原田神父様やよいリーダーに出会い、高校生会の一員として、教会にとどまることができました。学生時代はカトリック修道会の運営する寮に住み、寮母のシスター方に何かと支えていただくばかりでした。

怠惰な私が、カトリックの信仰からかろうじて離れることがなかったのは、一つには代母様、神父様方、シスター方、教会の知人の方々などの神様を愛する多くの人々に支えられ、励まされ続けたためでしょう。そういった方々を通じて、私は神様の愛を実感をもって知り、神様のもとに何とか戻ってこられたように思います。もう一つには、この信仰は亡き父が私に遺してくれた重要なものなのだ、と心の奥底で感じていたためだと思います。これらはまことに不思議な導きであったと感じています。もしこのような出来事や環境、出会いがなかったとしたら、理屈っぽい上に新しい所に飛び込む勇氣もない私は、分別がつくようになった後に自らキリスト教に入信することは、おそらくなかったのではないのでしょうか。私の境遇を聞いたあるシスターが「それは、大変な試練だったけれど、大きな贈り物だったね」と仰しゃいましたが、そうなのでしょう。贈り物をもらうよりも、二人に生きていて欲しかったなあ…と当時はちょっぴり思いましたが。

しかし、社会人になってからの私は、教会から遠のき、ますます信仰を深める努力をしなくなりました。再び岡山教会に通うようになって、ただミサに与るだけで心は神様に向かわず、共同体の中でも完全に「お客様」状態でした。



そんな私が福山に来ることになり、最初に自分の意思で向かった場所が福山教会だったので、乙女峠祭りを始め様々な行事で、掃除の後の地区懇親会で、またミサの後のコーヒーショップで、皆さんが本当に温かく迎えてくださったことで、慣れない土地でどれほど支えと安らぎを得られたかわかりません。皆さんのお姿を見て、自身の祈りが足りないことも、神様に向かう姿勢が真摯でなかったことも痛感し、反省しました。また、多くの方々に声をかけていただいた

結果、共同体の中で何らかの役割を担えるよう、ほんの少し意識して行動するようになりました。（といっても大して行動できてはおらず、役にも立っていないのですが…）このことは行動力に甚だしく欠ける私にとっては、大きな変化でした。ここ福山で、私は成長させていただいたと思っています。

ここまで駆け足で振り返ってみましたが、あらためていくつかのことに気付かされます。この数十年の人生で、自身では気付かなくとも、神様の恵みと導きが絶えずあったこと。困難な時、苦しみ悲しむ時、イエスが共にいてくださったこと。人間には到底考え及ばない、神様のみ計らいのうちに、小さな私は生きてきたのでした。「神の計らいは限りなく、生涯私はその中に生きる」という詩篇の言葉が、聖歌のメロディーとともに、心に深く沁みこむのを感じます。

私は今、遅まきながら「これから先は、もっと人を愛し、信仰のうちに生きていきたい」と願っています。家庭でも、社会生活においても、信仰者として生きるにはまだまだ相当の努力が必要ですが、慌ただしい毎日の中でも、ごまかさず、諦めずに信仰の光を目指して歩んでいきたいです。神様のみ計らいを信頼しながら…。

長々しく拙い文章を、ここまで読んでくださってありがとうございました。そしてまたこの場をお借りして、今までの数々の温かいお声がけ、お心遣いにあらためて感謝申し上げます。

満開の桜が散る頃になるのでしょうか、暖かい春の陽射しの中で、主のご復活の喜びとお恵みが、全世界と福山教会の皆様おひとりおひとりの上にありますよう、心よりお祈りしております。

南相馬便り㊿2022年2月

援助マリア修道会南相馬修道院 北村令子



梅の香りが漂う頃となりました。ここ小高は紅梅の里と言う別名があります。小高神社、相馬藩の城跡「浮舟城」も「紅梅浮舟城」と言われるほど紅梅がたくさんあったようですが、今はその名にふさわしくないほど紅梅は少なく、4月にはむしろ枝垂桜が美しい所です。きっと震災前にはそこここに紅梅がたくさん咲いていたのではないかと思います。原発事故のため、その多くは除染のために切り倒されたのではないのでしょうか。修道院の川向こうにある高齢者施設の名称も

「梅の香」ですし、小高に設立された農業の会社の名前も「紅梅ファーム」などいろんなところに紅梅が冠せられています。紅梅の花がたくさん咲いている里を思い浮かべると、本当に美しい里山が放射線でけがされ、除染と言う処置によって姿を消してしまったかと思うと、悲しく悔しい思いがします。

大熊町の帰宅困難区域が、今年の春一部解除されます。昨年12月3日のニュースで、14世帯28人が帰宅準備宿泊の希望を申請していると報道されました。大熊町は福島第一原発か

ら数キロ（5～7キロ）で、まだまだ解除されない区域が多く、解除されたところは18%に過ぎないとのこと、帰宅する方の周辺は除染されるようですが、未除染地域が多い中で、生活に本当に支障がないのかも不安だと思います。1000世帯も住んでいた地域に、たったの14世帯で生活ができるのだろうかと思ひます。



小高区に隣接する浪江町では、昨年10月24日に請戸小学校が福島県で唯一の震災遺構として公開されました。「請戸小学校は海岸から300メートルに位置する。震災当日はすでに下校していた1年生11人以外の2年生から6年生までの児童82人が校舎内にいた。校長の指示により、西に1キロほどの高台大平山（現在の大平山霊園：震災で亡くなった方の共同墓地）に避難。この時この高台への上り口が分からず、そこを野球の練習

「震災遺構浪江町立請戸小学校」

場にしていた児童の誘導で登ったとのこと。しかし、そこもあの津波で危険と判断され、国道6号線をたまたま通りかかったトラックの運転手の好意により全員荷台に乗り込み役場まで移動、全員無事だった。」（福島民報 2021.10.24 抜粋）

この時の1年生の子供たちが、今高校3年生になっていて、10年ぶりの対面の報道がありました。お互いに震災後別れ別れになっていましたが、会ってすぐ、1年生の時の仲の良かった時を思い出して懐かしがっていましたが、その言葉の中に、自分たちには思い出す故郷での小学生時代はなく、自分のくぐってきた体験を誰にも知らせないように気を遣って生きてきたとの共通の思いを語っていたのが、私には心に響きました。また当時小学校6年生だった女性（23歳）が、「津波で家や思い出の品全てを失った私にとっては、校舎が残ってくれたことが嬉しく、ここに来ると明るい気持ちになれる。」と言っておられました。2015年10月に私はこの請戸小学校を視察に来させていただきました。第一原発から7キロに位置する請戸小学校は、当時はまだ特別許可を受けた者だけに立ち入りが許されるのでした。学校の外



壁に「…電源補助金…」と書かれたプレートが張ってありました。電源補助金と言えば東京電力福島第一原子力発電所を誘致するために交付される補助金です。体育館に入って驚きました。舟形の体育館で、さぞ立派だったろうと想像し、目の前の床が波打って破れ、大きな釘が剣山のように露出している様に、思わず涙が出ました。私はちょうどその頃、福山暁の星学院の小学校の体育館の建築の資金繰りに頭を悩ませていた時で、いったいこの体育館には何億のお金がつぎ込まれたのでしょうか。と

（写真は2019年のものです。）



(亡くなった方 82 名の刻名)

余計なことを考えてしまったことを思い出します。 近くの請戸漁港も周りの田んぼも荒れたままで、墓地の墓石がぐちゃぐちゃに砕け倒れたままでした。ここは漁業の街として、民家も多く建ち並び賑やかな所だったようですが、一軒の家も残らず流され、だだっ広い荒れ地に請戸小学校だけが痛ましい姿で残っていました。多くの方が行方不明になりましたが、原発事故のため捜索活動も行えず、自衛隊が重装備で捜索を始めたのが 4 月 3 日とのことです。家族を探しに入ろうにも放射線のため、立ち入り禁止になっていて、どれだけの方が探すことができなかったことで、今も苦しんでいらっしゃるのでしょうか？ 今は、請戸漁港も 昨年 の 4 月 から本格操業をし、少しずつにぎやかさを取り戻しています。子供たちが避難した 高台、大平山は「大平山霊園」として、めちゃめちゃになった墓地が移転され共同墓地となっています。

来月は 11 年目の 3.11 がやってきます。今日はここまでといたします。皆様どうぞお大事にお過ごしください。

おまけ



修道院から歩いて 2,3 分の所に、貴船神社があります (火の神様とのこと)。今年震災から 11 年ぶりに、「火伏祭り」というお祭りが行われました。護摩炊きだと思のですが、笛の音に合わせて獅子舞を献上していました。朝、カリタスからの帰りに通りかかってやっていたので、すぐ出直して見に行きました。消防自動車が出ていて、消防団の方が数名周りを取り囲んでおられました。人垣ができていたのでうまく写真が撮れませんでした。鳥居の内側で獅子が舞っています。



(1 月 9 日)

お神輿があるはずですが、若者がいなくて、出来なかったそうです。それに小高神社での出初式は、無観客で行われたそうです。コロナのため、残念ですね！ (火は既に小さくなっていました。)

【帰天のお知らせ】

- ・2月8日マリア今川笑子(89歳)
- ・2月24日マグダラのマリア中崎良江(85歳)
- ・2月28日マリア・テレジア佐々木妙子(92歳)

謹んでお知らせします。どうぞ心を合わせてお祈りください。

3・4月の行事予定

3 月		4 月	
2(水)	灰の水曜日	3(日)	四旬節第5主日
6(日)	四旬節黙想会(李神父様)	10(日)	受難の主日(枝の主日)
18(金)	聖園卒園式	13(水)	聖香油
20(日)	侍者デビュー ～23日迄 ダン神父(福知山)	14(木)	聖木曜日(主の晩餐)
21(月)	助祭叙階式	15(金)	聖金曜日(主の受難 大斎小斎)
23(水)	聖園終業式	16(土)	聖土曜日(復活徹夜祭)
		17(日)	復活の主日



2018年3月号から始まった月報。毎回原稿があるのか、続くのかどうかと思いながらも、これまで続けてこられたのも原稿依頼したら快く引き受けてくださる皆様がいらっしゃるから…そして毎月1度の月報委員会。ゆったりとした時間の中で次号の案を出し合いながら、その合間にお互いの近況報告や信仰の話、家族の話を交えながらのひと時。池田春子さんは、静かに控えめながらしっかり校正してくださったり、原稿依頼のお願いをしてくださったり、お忙しい中、印刷のお手伝いに来てくださったり…本当に良い時間を共に過ごしていただきました。ちょっと寂しいけど、これまで有難う♥ 月報委員会